

CODE
Letter

2008.4.30 VOL35

(特活)CODE海外災害援助市民センター発行
〒652-0801 神戸市兵庫区中道通2-1-10
TEL:078-578-7744 FAX:078-574-0702
e-mail: info@code-jp.org URL http://www.code-jp.org/
郵便振替:00930-0-330579

今号の内容

- ・ 高校生インターンの突撃インタビュー (その2)
- ・ プロジェクトニュース
- ・ 寄稿-エコ・プラワットさん(ウォータープロジェクト)
- ・ 総会とCODEの夕べのお知らせ

CODEがめざす行動と思想

CODE海外災害援助市民センターは、阪神・淡路大震災から5年を経て震災復興に取り組んできた被災地のNGO・NPOや多くの市民活動家たちが「被災地責任」を明確に意識する中から構想が生まれ、1年間の構想委員会を経て2002年1月17日に発足した。

この2月17日に開催した法人取得5周年記念フォーラムは、震災から13年の歩みを振り返るとともに、CODEで育った若者たちから多くを学び、いま本格的に胎動しつつある「新しい市民社会」へ向けたCODEの役割を探った。

フォーラムの第3部では、CODEの芹田健太郎・代表理事と室崎益輝・副代表理事が1・2部の議論を踏まえてCODEがめざしてきた「理念と役割」を語り合った。二人の語りの中から、進化を遂げる新しい市民社会を具体化していくための視点を見い出してみたい。

震災が起きた1990年代は歴史的な転換期といわれる。冷戦構造が終焉し、戦後の成長型経済が終わり、政治、経済、社会の構造が大きな変化を遂げはじめた。被災地では95年以降の変化を「震後民主主義」とも呼び、戦後民主主義から新たな展開をはじめたことを実感してきた。CODEが生まれた背景もここにあった。

国家や「官」や組織や主導する時代に綻びが広がり、市民とNGOが社会を動かす有力なセクターとして登場してきた。それまでの社会で反映されなかった小さな声や「つぶやき」を政府にぶつけ、社会の悪弊やウミを抽出し解決していく「新しい主体」が求められていた。災害がそれを気づかせ、まだ行政の中に残る「愚民思想」を排して、市民を信頼し、市民自らが立ち上がることによって問題の解決を図ることができるという本来の民主主義の道筋が見えてきた。市民とNGOの「防災」国際フォーラムにおける「'95神戸宣言」からCODE設立へつながる動きは、そうした変化を象徴していた。

この間に生じた人びとの生き方や働き方、幸せ観、人間関係についての価値観の変化は、震災以来CODEが一貫して掲げてきた「最後のひとりまで」を大事にする価値観に象徴される。震

災当初には「最後の一人まで助けたい」という素朴な気持ちから発したものだだったが、いまでは「最大多数の最大幸せ」を追求する20世紀型の「多数支配社会」を乗り越える原理として意識されはじめている。多数派が強者として少数者を排除している現代社会の中で、いま一度「少数者を尊重する民主主義原理」につながる思想である。市民は多数者が支配する国家のために働くのではなく、一人ひとりの市民に依拠して、「最後のひとり」を大事にする視点を失わない。自らがどのような立場、だれの立場に立つかという「立ち位置」が問われているということであろう。

もう一つの視点は、「支えあう社会」へのかかわり方である。この国の社会は、自殺者が年間3万人を超えるというんでもない社会になっている。ひとと社会も互いに向き合い、つながりあってこそ存在しえる。「つながり」をどうつくり出していか、その担い手をどのように生み出し、育てていくかが重要である。

CODEの援助活動は、支援しながら学ぶことによって支援されるという、相互性のある支援活動である。「男女共同参画社会」というお役所的な言葉より、「男女が支えあう社会」という方がふさわしいように、支えあう社会とはそれぞれが役割と責任を果たす社会である。そのためにはまず、それぞれが責任を果たしているかどうか問われるべきであろう。

CODEの生みの親であった故・草地賢一さんの「あらゆる災害は変革を迫る」という言葉があらためて思い起こされる。ボランティアは正義と公正を実現するために活動するとも唱えていた。新しい市民社会へ向けてそのような思想と行動が伴っているかどうか。あらためて問い直してみたい。

CODE海外災害援助市民センター
理事 松本 誠
(市民まちづくり研究所所長)

高校生インターンの突撃インタビュー（その2）

前号に引き続き、CODEの高校生インターシップとして活動し、CODE理事4名に行った黒田如美さんのインタビュー記事を掲載します。今回は榛木恵子さんへの突撃インタビューです。

榛木 恵子（関西NGO協議会事務局長）

関西NGO協議会の活動内容を教えてください。

関西NGO協議会とは、関西を中心に活動している国際協力NGOが26団体加盟している地域型ネットワークNGOです。相互に経験共有、情報交換を行い、連帯を強めることより、各団体の運動や活動がより充実・発展することを目的としています。活動は、ネットワークの構築 政策提言 参加促進・担い手育成です。具体的なプログラムは、加盟団体間の経験・情報提供のミーティング、外務省、JICAとの定期協議、国際社会やNGO活動について学ぶ参加型セミナーの「関西NGO大学」の開催などです。

活動していて苦労することはありますか。

関西NGO協議会を運営するにあたって、自己資金源が乏しいこと、財政は、外務省、JICAの受託事業、助成金等の割合が高く、自主財源となる団体会員の会費、政策提言寄付、自主事業からの収益の増加に取り組んでいます。また、各NGOに必要な情報を発信する役割を担っていますが、その情報収集の方法と広報にも常に工夫が求められています。

阪神・淡路大震災で特に記憶に残っていることは何ですか。

当時所属していたNGOは、国際保健活動分野の団体でした。阪神・淡路大震災(以下大震災)は、緊急事態だったので、国内の災害救援に始めて参加しました。1月19日に、海外で緊急救援を経験している医師が到着して、周辺の被害状況を調査して、西宮体育館に本部を設けました。その後、登録されたボランティア医師、看護師の人材派遣と診療プログラムを3つの医療保健NGOが連携して、3月中旬まで継続しました。当時は、交通網が寸断されていたので、医師、看護師を運ぶオートバイの運転手が必要となりました。ラジオで運搬ボランティア募集を呼びかけ、数名の被災しているライダーが積極的に、活動に参加して貰ったことが印象に残っています。



メディアでは今後また大きな震災が来ると報じられていますが大震災を経験した私たちがすべきことは何だと思いませんか。

大震災で学んだことを、防災して今後に生かすということが第一です。町単位でのコミュニティ作りが、今後の防災に強い社会の基礎を作っていくと思います。

大災害の被害をゼロにすることは難しい。だから一人ひとりがいつ起こるのかわからない災害に備えて、意識を高めておくべきです。大震災以後、世界中で多数の自然災害がおこっています。日本では月日が経ったせいか、緊張と意識が薄れているのではないかと思います。定期的に地域ベースで防災について見直す機会を設けることが重要かと思えます。

私は震災児5才で震災の記憶はありますが中には「あまり覚えていない」という友人もいます。そのような震災の経験がない若者に伝えたいことはありますか。

次に大きな大震災が起きた時、地域の救援と復興を担うのは、若い人たちです。実際に被災された方の話を聞いたり、大震災のゆれを体感できる「人と防災未来センター」を利用したりして、大震災を具体的に感じて欲しいです。災害について理解しておく、予期しない災害が起こったときに対応ができ、被害を減少させられます。また、ボランティアやNGOに興味はあるけれど、踏み出せなかった人も勇気を出して、関心のあることから関わって見てください。

20周年記念関西NGO協議会主催の写真展「子どもとおして世界」はどのような意義で開催されたのですか。

子どもに焦点を当てたのは、11月20日が「世界の子どもの日」であったことと、子どもたちの写真を通して世界の現状を知って貰う目的は、20周年記念事業として、加盟団体と共有できるテーマであると考えたからです。今回は、対象に興味、関心のある人や、関わりのある人でなく、普段NGOに接する機会の少ない人に、活動を理解し、興味を持って貰うことを狙いとしました。そのために、会場は人通りの多い場所を選んだり、会場で配布するために、加盟団体の情報が掲載されているハンドブックも作成しました。

合同写真展は、22団体が参加して、約70枚の写真パネルを展示しました。

最後にCODEに一言お願いします。

関西では、自然災害の救援活動に対応できる団体は少ないので、CODEは貴重な存在です。大震災が原点であるという姿勢を崩さず、被災住民への思いやりを持ち続けるNGOとして、軌跡を積み重ねて頂きたい。

[CODEプロジェクトニュース]

呼び水プロジェクト

(ジャワ島中部地震被災村落におけるパイプライン敷設プロジェクト)

2006年のインドネシア・ジャワ島中部地震の被災地であるジョグジャカルタ州のグヌン・キドゥル県パンガン郡ギリサカリ村は地盤が固い岩盤のため井戸を掘ることができないため、生活用水を雨水に頼ってきました。加えて雨期も短いため、乾期には旱魃の被害を受けるなど水資源に恵まれていない地域です。毎年乾期には慈善グループの厚意で配られる水に頼っていましたが、しばしば民間業者の移動タンクの高価な水を買わなければいけません。どの世帯も4ヶ月生活するために7つのタンク、5000リットルは買わなければならないと見られていました。地震発生によってこの村も被害に遭いました。それ以来、住宅再建は完了しましたが、水の問題は依然残っていました。行政の敷いた上水道が一番近くの幹線道路沿いに通っていますが、それでも村から約1キロ離れているため自分たちで枝管を敷いて引いてこなければいけません。枝管を敷くためには村人たちにとってはかなり高額な資金が必要となります。行政が供給する上水を利用した方が民間業者の水を買うよりはるかに安価で、それが可能になれば人々が農作業や家内工業に従事する余裕ができ、村での生活を改善する機会を作り出すことが期待できます。



敷設中のパイプライン

戸を掘ることができないため、生活用水を雨水に頼ってきました。加えて雨期も短いため、乾期には旱魃の被害を受けるなど水資源に恵まれていない地域です。毎年乾期には慈善グループの厚意で配られる水に頼っていましたが、しばしば民間業者の移動タンクの高価な水を買わなければいけません。どの世帯も4ヶ月生活するために7つのタンク、5000リットルは買わなければならないと見られていました。地震発生によってこの村も被害に遭いました。それ以来、住宅再建は完了しましたが、水の問題は依然残っていました。行政の敷いた上水道が一番近くの幹線道路沿いに通っていますが、それでも村から約1キロ離れているため自分たちで枝管を敷いて引いてこなければいけません。枝管を敷くためには村人たちにとってはかなり高額な資金が必要となります。行政が供給する上水を利用した方が民間業者の水を買うよりはるかに安価で、それが可能になれば人々が農作業や家内工業に従事する余裕ができ、村での生活を改善する機会を作り出すことが期待できます。

CODEはまずこの枝管敷設と貯水タンク建設のための資金協力をすることになりました。村人たち全員

CODEはまずこの枝管敷設と貯水タンク建設のための資金協力をすることになりました。村人たち全員



村の貯水タンクの建設作業の様子

がゴトンヨロン（相互扶助の慣習）によって、自分たちでパイプライン敷設、貯水タンク建設作業を行いました。近隣の村からも応援に駆けつけた人も含め約171人が作業を行い、約16日間の懸命の作業の結果、当初予定していたよりも5日も早く作業は完了し、この村の人々がこの貯水タンクを共同管理するための委員会が設立されました。4月20日エコさんの妻リナワティさんがCODEを代表してタンクの蓋を開け、パイプライン敷設プロジェクトの落成式を行いました。その中で彼らは管理責任者のハディさんを通じて、CODEへの感謝と喜びを表明しました。現在ギリサカリ村の人々はこの貯水タンクから清潔な水を利用しています。



竹を枠に使っての建設作業

この呼び水プロジェクトにおいては、パイプライン敷設はまさに“呼び水”としての第一歩であり、これからの展望として、ギリサカリ村およびその周辺



貯水タンクの蛇口をひねる

を、まずパーマカルチャー（農業を基盤とした持続的な環境デザイン）によって、持続可能な生活ができるような生態系に変えていき、この土地に適した農産物を育て、そのために必要な灌漑用水の確保のために、これまで通りのタンクによる

雨水の貯水やため池などの自然地形を活用しつつ、恒常的な水の確保を目指すという壮大な夢を持っています。それによって、パーマカルチャーによる将来世代のための持続可能なくらしを実現し、またこの地域の防災に活かすことも目指していきたいと考えています。

[CODEプロジェクトニュース] 草の根技術協力事業

昨年度に引き続き、JICAの地域提案型事業として、CODEが継続的に支援を行っているアフガニスタンのミールパチャコット地区からぶどう農家の方々が来日し、7月9日から約1週間の農業研修を行います。今年度もパートナー自治体の兵庫県佐用町での研修を行います。今年は昨年奇跡的な出会いとなった恵泉女学院大学准教授の澤登早苗先生がぶどうの有機栽培を行っている甲府の農場での実習も行います。ここに昨年度の澤登先生が行った感動的な講義のレジュメを掲載します。（写真は昨年度のものです。）

ブドウの有機栽培

現在日本で栽培されているぶどうの大半は、西アジアを起源とする欧州種、米国東部を起源とする米国種、あるいはこれらの雑種である。アフガニスタンは、紀元前一千年ごろからぶどうがあつたとされているが、これに比べると日本におけるぶどう栽培は、長く見積もっても千年程度でしかない。



棚田作りのための石積み体験

そういった点で、アフガニスタンから私たち日本のブドウ栽培者が学ぶことがたくさんある。もう故人となつてしまつたがぶどうの民間育種家であつた私の叔父は、ぶどうの源流を探るために世界各地を調査にでかけていったが、中でも最も実りが多かつたのがアフガニスタンであつたようだ。

当時の様子を記した叔父の著書を調べてみたところ、1974年の8月、約1ヶ月をかけてカイバル峠を越えて、アフガニスタンに入り、原生状態にちかいものや半野生のぶどうを見てきたそうだ。そこには、カイバル峠の自生ブドウの前で撮つた写真やカブール郊外のブドウ園の写真が掲載されており、カンダハール付近で行われている栽培方法について、また、

カブール郊外にはギリシャ語で「ブドウの里」を意味するイスタルフといわれるぶどうの栽培地があり当時、日本の全栽培面積に匹敵する広さでぶどうがつくられていたこと、また「カンダハール」「ヘラート」「カブール」は良質ぶどうの大規模生産地



大豆加工工場で豆腐作り体験

として有名であつたこと、人口わずか一千万人の国で7万ヘクタールもブドウがつくられていること等が記れている。そして、最後は、カイバル峠を越えた西側、夏雨が降らないアフガニスタンは生食ブドウの栽培に最も適した地域なのである、と結ばれている。

今では、このとき採種してきたぶどうの種子から育成された品種も誕生している。この叔父と二人三脚でぶどう栽培の技術開発を行つてきた私の父に、今回「ぶどうプロジェクト」の話をしたところ、大変関心を示すとともに、健康上の理由で1974年のこの調査に参加できなかった無念の思いを語ってくれた。また、このようなプロジェクトに、私が関わることになったことをたいへん喜んでくれた。と同時に、



実つたぶどうの袋がけ体験

アフガニスタンはブドウの発祥の地であることを忘れるなどアドバイスしてくれた。というのも父が農業や化学肥料を一切

使用しないぶどうの有機栽培に成功した最大の理由は、ぶどうの源流である中央アジアの条件からヒントを得たからである。生食ブドウの栽培に最も適しているといわれているアフガニスタンのブドウ農家の皆さんが、夏が高温多湿でぶどうの栽培に最も適さないとされている日本のブドウ栽培から何を学ぶことができるか、そんなことを考えながら講義を組み立ててみた。

[寄稿] エコ・ブラワットさん



兵庫県の海外研究ネットワーク事業として、神戸学院大学はインドネシアの大学の講師であるエコ・ブラワットさんを研究員として招聘しました。日本到着直後の1月17日が阪神・淡路大震災発生から13回目を迎える追悼の日であったため、エコさんは早朝CODE事務局の庭で毎年行っている小さな追悼の集まりに参加した後、あちらこちらで追悼行事が行われているKOBEの被災地を回られました。今回はエコさんに寄せていただいた、KOBEでの追悼行事に参加して感じたこと、考えたことなどを綴った文章を掲載します。

「ろうそくの火を輝かせて・・・」

KOBEから世界へのメッセージ」

神戸での私の滞在の2日目、早朝村井さんがインターナショナルハウスまで私を迎えに来て、CODEの事務所まで車で連れて行ってくれた。朝の5時頃、到着した時はまだ暗く私にはとても寒く感じた。その時私は前日に村井さんが私に言っていた「追悼」とは何をするのかわからなかった。次々に集まってきた人たちがストーブの周りは混み合っていた。私は彼らに紹介され、彼らがいろいろな所、ある人はずいぶん遠くから来ていることがわかった。僧侶は準備に忙しい様子だった。彼はこの大事な行事のためにはるばる名古屋からやってきていた。テレビをつけると市役所前の広場で何千もの竹を並べて大きな「1・17」を形作る大規模な追悼式が放送されていた。

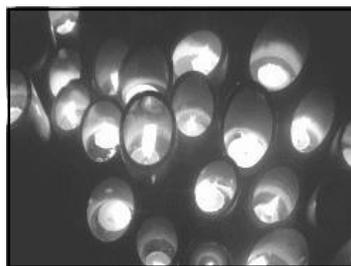
そして全員が外に出て庭にある祭壇の周りに輪になって立った。とても静かだった。暗く寒い、しかし平和な朝、いくつかのろうそくに火が灯された。5時46分ぴったりに追悼は始まった。我々全員が祈りを捧げた。今年は阪神・淡路大震災から13年目の記念日だった。とても強い震度の地震が神戸と周辺の地域に発生した。たった20秒の揺れが多くのものをすっかり変えてしまった。その時私は2年前のジョグジャカルタでの体験を思い出していた。突然大地が揺れ、55秒ほどの間地上の全てのものが揺れた時、もう止まらないのではないかと感じたあの時も早朝だった。私は揺れが強くなっていく間まだベッドの上にいる。本棚とテレビが目前で落ちた。屋根のタイルと木製のベッドがぎしぎしと音を出していた。私はベッドから飛

び起きて妻の手を握りベッドの下に横たわった。私は走って、しばらく外に出てみんなに家の外に出よう叫ぶことにした。まもなく家が壊れてしまうと思った。途中で養殖池の水が荒れて溢れ出ているのを見た。とても恐ろしかった。しかし幸運にも我々はみんな助かった。

神戸で私は人と防災・未来センターを訪れた。この資料館の展示には感銘を受けた。神戸は全ての経験を集めて、訪問者に伝えようとしているように感じた。我々は地震という災害から非常に多くのことを学ぶことができた。支援計画、住宅建設、都市インフラ、耐震建築、NGO、NPOの役割、若者への教育、その他数多くのことである。

CODEは数年前この災害の追悼式を始めた。そしてそれは他の多くの場所で毎年続けられている。人の人生は自然のリズムに比べて非常に短い。地震の周期は人間の寿命を越えるものでそれは100年毎、いやそれ以上だろう。しかし確実に地震はある周期で何度も何度もやって来るし、我々はそれを予知することはできないかもしれない。追悼には災害の記憶を伝えるという意味もある。それを行うことによって他の人々は過去の経験を知り学ぶことができる。我々が様々な時に世界中から集めたどの知恵や知識も他の人々にとってとても有益なものになるだろう。

KOBEの人々は他に比べ何歩も先んじて地震に関する知識を得ている。そして彼らは進んで他の人々、若い世代、そして他の国、世界の人々とそれを共有しよう



東遊園地の希望の灯り(エコさん撮影)

としている。これは少しでも多くの将来の災害の被災者を救い、被害を避けるためにとても協力的な、責任ある、寛大な姿勢である。私はこの追悼式に参加しこの日に祈りを捧げることができた

ことをたいへん幸運に思う。深い思いと知恵を確かに私に伝えてくれたからである。そして他の人々にそれを伝えることに喜びを感じる。あのろうそくたちは周囲に、そして世界に輝きを与えた—他人と分かち合い、いたわり合う心、そして将来の人類の生存への力強い希望を。私たちは同じ火の輪の中にいる生きとし生けるものであることを理解したのかもしれない。

CODE総会、CODEの夕べのお知らせ

来る6月15日(日)18:00より、平成20年度非営利活動法人CODE海外災害援助市民センター総会を開催する予定です。総会では平成19年度の事業報告及び決算報告と平成20年度の事業計画・予算計画を審議いたします。正会員のみなさんは是非ともご出席いただきますようお願いいたします。

また総会終了後には、CODEの夕べ～楽しい食事と報告会を神戸の三宮にある家庭料理の店”サロン・ド・あいり”で開催します。CODEが進めている救援プロジェクトをスライドを交えながら報告します。食事を交えながらのアットホームな交流の場になればと考えておりますので多くのご参加をお待ちしております！

日時 6月15日(日)18:00～21:00
場所 サロン・ド・あいり TEL:078-241-1898
住所 神戸市中央区雲井通4-1-23
アスティ三宮207 (三宮から歩いて15分)
スケジュール(予定)
18:00～19:00 総会
19:15～21:00 CODEの夕べ

活動記録 1/1～4/20

- 1月9日 甲南女子大学で講義(村井理事)
- 1月13日 日本災害復興学会発足総会(村井理事)
- 1月14日 日本災害復興学会発足記念シンポジウム「新潟、輪島、兵庫から復興戦略を語る」(村井理事)
- 1月16日 エコ・ブラワットさん来日
(～2月18日、兵庫県海外研究者ネットワーク事業)
- 1月17日 阪神・淡路大震災13回目の追悼の日
- 1月18日 国際防災シンポジウム2008「持続可能なコミュニティに向けて」(村井)
- 1月20日 コープ・ファミリーフェスティバル西宮(細川)
- 1月21日 CODEフォーラム企画委員会
- 1月25日 「阪神・淡路大震災から学ぶ」エコさんへのレクチャー(村井理事)
- 1月27日 2004年インド洋地震津波災害研究フォーラム(村井)
- 1月30日 CODE理事会
- 1月31日 「ジャワ島中部地震から学ぶ」エコさんのプレゼン
- 2月4日 エコさん、神戸大学都市安全研究センター・北後教授と意見交換
- 2月7日 IRPより「ジャワ地震後の復興状況について」エコさんからヒアリング
- 2月9日 「震災後のまちづくり～魚崎地区の取り組みとコレクティブハウス」をエコさんにレクチャー(野崎理事)

- 2月11～14日 エコさん「能登半島地震から学ぶ」調査旅行
(村井理事、法化図)
- 2月17日 CODE法人取得5周年記念フォーラム「いのちと向き合う、くらし再建の『いま』を見ずえて」
- 2月19日 神戸学院大学 防災・社会貢献研究会(村井理事)
- 2月20～26日 スリランカ幼稚園児の絵画展
(於 神戸学生青年センター)
- 2月21日 ワールドボイス事業、松蔭女子高校生の翻訳ワークショップ(村井理事、澤)
- 3月9日 防災士研修で講義(大阪、村井理事)
- 3月10日 CODE理事会
- 3月11日 日本生活協同組合連合会において研修及び講演(村井理事)
- 3月10～14日 留学生セミナー(JICA委託事業)
- 3月17日 国際防災・人道支援フォーラム2008に参加(村井理事)
太平洋島嶼国に関する防災ワークショップ・レセプション
に出席(細川)
- 3月29日 チャリティライブ”KOBÉ DEEP BLUE HEARTS”
- 4月8日 神戸学院大 防災・社会貢献ユニット講義(村井理事)
- 4月15日 神戸学院大 防災・社会貢献ユニット講義(村井理事)
- 4月18日 アフガニスタン農業研修フィールド事前調査で山梨へ(村井理事)

ありがとうございます 1/1～4/20

会員・寄付者ご芳名(以下順不同・敬称略)

一般寄付

個人: 中谷勇一、斉藤茂樹、庄司俊恵、鶴飼愛子、森和子、成毛典子、水島勉、春日千明、岸本くるみ、羽島新菜、杉村友子、岡本千明、高橋澄枝、三島宣彦、三島一男、岸田三枝子、斉藤容子、細川裕子
団体: 御津ボランティア協会、西覚寺仏教婦人会、めふこプ委員会、ひょうご・まち・くらし研究所

会員

・正会員

個人: 中川和之
NPO: 阪神高齢者・障害者支援ネットワーク

・賛助会員

個人: 中谷勇一、市丸仁一、庄司俊恵、木下カヨ子、鶴飼愛子、大津暢人、鈴木嶺、水野浩重、岩崎信彦、岡本芳子、遠州龍子、郡あや子、栗原謙治、藤田正、山添令子、安藤尚一
NPO: 小さな友の会、アート・サポートセンター神戸、
団体: 林山朝日診療所

おわりに

今号も当初の予定より1ヶ月遅れての発送になってしまい申し訳ありません。3月29日のチャリティライブへは事務局+若者の5人で参加しました。ライブ中に出演アーティストの1人がMCで「みんながこのライブで楽しむことが、いい支援につながっていくと思う。」と話していたのが印象的でした。(S.F.)